虎人少年　外伝～それから

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎人少年　外伝～それから

【Ｎコード】

Ｎ５５９６Ｄ

【作者名】

ｔｅｎｓｕｋｅ

【あらすじ】

俳優結城聡史とその付き人兼同居人の小林虎人の物語です。虎人をめぐる人間模様と二人の成長を描きました。ほんのりＢＬ味です。

1．雑踏にて

1．雑踏にて

人々が行き交うターミナル駅のコンコース
黒いキャップを目深に被り　焦げ茶にも黒にも見える
革とキルトのコンビ素材の個性的なジャケットをさらりと着こなし
すらりと長い脚はクラッシュドジーンズとごついブーツに包まれている
細く見えるが十分な肩幅がそのしなやかな筋肉に覆われているであろう
均整のとれた体躯を偲ばせる
キャップに覆われた形の良い小さな頭の彼は
１８０センチはありそうな見事な９頭身だ
その肩からは派手なオレンジ色のリュックが下がっている

彼は時折　半歩程後ろからつかず離れず同行している
もう一人の青年に何やら話しかけながら　その形のよい
赤くふっくらとした唇にうっすらと笑みを浮かべて歩いてゆく
帽子のつばに隠された白く小さな綺麗な卵形の輪郭に
こぼれ落ちそうな　大きなやや茶色がかった瞳が長い睫に縁取られている
まるで男装の麗人のような　華やかな　それでいて
どこか儚げな　妖しい程に端正な美貌の青年だ
耳に光るシルバーのピアスがイマドキのお洒落な若者らしい

話しかけられている青年は彼よりも更に頭半分程背が高い
まだどことなく幼さの残る顔立ちながら
目尻のつり上がった大きな黒目がちな瞳は鋭い光を放ち

ぎゅっと　への字につぐんだ口元が印象的な
どこか野性的な雰囲気の持ち主だ
彼もまた　長い手足をもてあますような均整のとれたスタイルだが
こちらは幾分オーソドックスな装いに身を包んでいる
身体に馴染んだダンガリーのシャツにコーデュロイのパンツ
ナイキのスニーカーに　紺色のボディバックを斜めがけにしている

これほどに大柄で　すらりとスタイルのよい青年2人が
人混みに紛れて人波を掻き分けるように進んでゆくのを
誰一人として振り返ろうとしない事が不思議に思える

その歩みは心持ち早足で　それでいて決して周囲の喧騒から
逃れようと急いでいる様子でもない

先を行く黒いキャップの青年が軽く振り返りながら話しかけるのに
うっそりと寄り添うように歩く一方の青年は表情もかえず
むっつりと頷いてみせたりしている
その彼は　時折　黒いキャップの青年を人波から守るように
その細い腰にそっと腕を回し　庇うようにしながら歩いてゆく

友人同士というには　どことなく上下関係を感じさせ
それでいて年下と思しき背の高い青年の態度は
黒いキャップの青年を見守っているようにも見える
兄弟というには　親密過ぎる空気の濃さをまとっており
強いて言うなら　恋人同士のそれに近い雰囲気を思わせる

これほどに個性的　かつ　魅力的な二人が
目立つ事なく　人々の注目を浴びる事もなく
黙々と歩みを進めていられる理由は何なのか

思うに　彼らは我知らず　その他を圧倒する程のオーラを
ひっそりと包み隠しているようだ
それは　彼ら自身の心持ちが大きく影響しているのだろう

おそらく　彼らには　自分達が素晴らしく魅力的な外見を持ち
人々から好ましいと思われる雰囲気と圧倒的な存在感を
放っているという　自覚がすっぽりと欠落しているのだろう

もしくは　そういった自分たちの特徴とも言える
大いなる力をことさらに振りかざしたいなどという欲求が
全くといって良いほど　ないのだと思われる
そうでなければ　これほどに見事にその気配をひっそりと
目立たず人混みに溶け込ませる事ができるハズもなかろう

彼らは　あたかも自分達の周囲を　何か目に見えない
透明なシャボン玉にでも包まれて　やんわりと風にでも
吹かれて流れてゆくかのように　変わらぬ歩調のまま
ただ静かに賑わう駅のコンコースから
百貨店の建ち並ぶ駅前の方へと消えていった

一人　小さなライカのカメラを握った男が
その背中を見送っている事には　気づく事もなく

2．ライカの男

2．ライカの男

「虎人ぉ～　腹減ったぁ～」
「もう少しで着きますから頑張ってくださいっ」
「ハラミぃ～　塩でぇ～」
「わかってますってば」
「なんで車ないのぉ～？」
「だからぁッ！車検で明後日にならないと戻ってこないんですっ！」
「代車はぁ～？」
「それを取りに来たんでしょうがっ！現場に届いてますってば」
「なんでマンションに届けてもらわなかったんだよぉ」
「文句ばっかりいってないで歩く！」
「腹減ったぁ～　つかれたぁ～」
「小学生以下ですね・・・・」
「脇腹いたいぃ～　歩けないぃ～」
「タバコやめたら体力もーすこし戻りますよっ！」
「やぁだぁ～っ！」
「とっとと歩けっ！」
「うぇぇ～っっ」
「えぇ～いっ　泣くな！」
「うぅっ・・・・」
「焼き肉食べにちゃんと連れて行きますから！」
「ういっす・・・」

そんな会話がされているとは誰の耳にも届きもせず
二人は駅の人混みを掻き分けながら　今日の撮影現場へと向かっていた

いつもなら　虎人が運転する車で現場入りするか
マネージャーの迎え　そうでなくてもロケバスというものがある
しかし　今日は現場がマンションから2駅の近さという事もあり
二人はこうして珍しく　公共の交通機関を利用してやってきていたのである

そんな二人を　遠巻きに眺めるひとりの男がいた
小さいながらも　スパイカメラとも呼ばれるライカの高性能カメラを構え
望遠レンズ越しに　二人の様子を伺っている
人混みの喧騒にかき消される小さなシャッター音
そのファインダーには　虎人の姿が捕らえられていた

男は二人の後を追う事はせず　踵を返すと　元来た方向へと
一人早足に戻っていった
男は駅の裏手に止めてあった目立たないセダンに乗り込むと
静かにその場を走り去った

男が向かった先は　車を走らせて１０分程の入り組んだ路地にあるひとつの雑居ビルであった　路地裏に車を止めると　男は細い階段のある
ビルの中へと入っていった
５階まで階段で上ると　男は一つの部屋の前で立ち止まり
呼び鈴を2回鳴らした

部屋のドアが中からガチャリと開けられ　男は静かに
すべりこむように部屋の中へと入った
ドアを開けて　男を迎え入れた地味なスーツ姿の女性は
すぐに自分の机に戻り　パソコンの画面を睨み元の仕事に取りかかった

部屋には古びた応接セットと　木製の事務机が窓際にあり
いかにもテレビドラマなどでみかけそうな
怪しげな　探偵事務所かヤクザの事務所のようだ

事務机に足を投げ出して座っていた男が
加えたタバコの煙をくゆらせながら　入ってきた男に声をかけた

「見つかったのか？」
ライカのカメラをポケットから取り出しながら入ってきた男が応える
「ええ・・・写真を何枚かとってきました
おそらく　間違いないと思います　で・・・いつ　やりましょう」
「ご依頼人からは来週の頭にはと言われているからな・・・・
早い分には文句もあるまい・・・都合がつき次第やってくれ」
「判りました　では手配をすすめさせて頂きます」
「おう　よろしく頼む」
「はい」

男達の姿はタバコの煙に包まれていた

3．誘拐・拉致・監禁？

3．誘拐・拉致・監禁　そして

「小林虎人　１９歳　ハーバードへのトップ合格を果たすも入学後休学して帰国
俳優　結城聡史の付き人兼新人俳優として芸能界活動を開始
数カ国語に精通し　専門は政治経済・・・・と
父親は現在国立大学教授・・・ね　出世したもんだ・・・・
母親は文筆業ね・・・その妹は世界的トップデザイナーで独身・・
となると・・・やはり彼しかいないワケですね・・・」

「そうです　今はどうしても彼が必要なんです
彼の優秀さをもってすれば　必ずや現在の苦境は乗り越えられるハズ
会長は　どうしても彼を　小林虎人を迎えるようにとおっしゃっておられます」

「手段は選ばない・・・と」

「その通りです　来週には株主総会も控えております
それまでに　どうしてもっ　どうしても　虎人様が必要なのですっ！」

それは　その名を知らぬ者はない某財閥系大手商社の社長室
口角泡を飛ばしているのは社長秘書の佐藤という紳士だ
そして　その相手は　かのライカのカメラの男だった

「社長の病状はそんなに深刻でいらっしゃるのですか？」
「残念な事に　主治医の先生のおっしゃるには　もうあと

もって半年かと・・・・・」
「そうですか・・・それはお気の毒に・・・
でも　社長にお子様はおられなかったのですか？」
「いえ・・・ご子息がおられました　確か今年２５歳になられます・・・」
「それなら　そのご子息がしかるべき手続きの後に・・・」
「いえ・・・それが社長はもう１０年も前に離婚をされておられまして・・・」
「ああ・・・それでお嬢様の・・・」

「はい　会長には社長の他に二人のお嬢様がおられましたが
長女の恵様は学生時代にどこぞの貧乏学生と駆け落ち同然に
お屋敷を出ていかれました・・・・妹の香様はいまだ独身でおられますし・・・」
「で　その貧乏学生だった小林氏が今は某国立大学教授で・・・」
「はい・・・会長の直系のお孫様は虎人様お一人なのです」
「なるほどね・・・財閥企業の泣き所ってやつだね」
「はい・・・こうしてあなた方にお願いしております理由でございます」

「手段は選ばず・・・ね」
「はい　なんとしても虎人様をお連れ頂きたいのです」
「本人は知らないんだろ？そんなことは」
「はい　恵さまは気性の荒いお方です　今度の事もお知らせは致しましたのですが　けんもほろろにとりつくしまもございませんでした
虎人様に　社長の・・・恵様のお兄様の後を継いで欲しいと
お願いいたしましたのに　恵様はご承知下さいませんでした」

「悪い話じゃないだろうに・・・・不思議だな？」

「調べさせた所によりますと・・・・どうやら虎人様がいまなさっている
お仕事というのも　そもそもは恵様がご友人方と示し合わせて
ご自分たちがご贔屓にしている俳優の結城聡史に近しく置きたいと
虎人様を芸能事務所に送り込んだとかこまないとか・・・・」
「へぇ～・・・おもしろい母親もいたもんだな・・・」

「とにかく・・・我が社の社運をかけて　次期社長として虎人様が
必要なのです」
「判りました　お力になれるよう努力いたします」
「よろしくお願いいたします」
「場所は」
「お屋敷の方へ」
「了解しました」

4．部屋にて

4．部屋にて

その夜
自分たちのいる部屋からそう遠くもない建物の一室で
このような会話がなされているなどとは知る由もない虎人と聡史は
その頃
一日の仕事を終えて　住み慣れたマンションの部屋へと戻ってきて
いた

「奈良とか地方のロケが多かったから　この部屋でゆっくりするの
久しぶりですよね」
コーヒーの入ったカップを聡史に差し出しながら虎人がぼそりと言う
「だなぁ～　やっぱり家はいいよなぁ～」
「ですよね　落ち着くし・・・それに・・・」
「それに？」
「二人はいいなぁ～　とか・・・ね」
「とかね　かよ　なんだそりゃ（笑）」
「笑っちゃうんだ結城さんは・・・いーですよ　どーせ僕だけで
すよ」
「そんなことないよぉ～　俺も虎人と二人は好きだよ　一番ゆっく
りできる」
「どーだかぁー」
「何だよ　からむなぁ」
「西崎さんとか」
「ああ　彼はまた少し違うなぁ
虎人が俺の世話をあれこれ焼いてくれるみたいにさ
何かしてあげたくなるっていうか　そういう人だよ　西崎さんって」

「僕には何もしてやりたくないんですね」
「虎人は何でも自分でできちゃうじゃん　からむなよ」
「そーですけど・・・」

珍しく少しむくれた顔で俯いた虎人が　１９歳の少年らしく見えて可笑しかった
聡史はくすくすと楽しそうに笑いながら　虎人を手招きした
「こっち来てみろよ　虎人」
「なんですか・・・・」
「虎人にもちゃんとしたい事あるよ」
「へっ？」
「必殺　エロちゅぅー」
「・・・・・殴りますよ」
「可愛くねぇなぁ　ちゅっ！」
「んっ！！」

聡史にいきなりその唇を塞がれて　虎人はじたばたとその腕から逃れようともがいた
「ってぇ～いっ！　やめて下さいよぉ結城さん」
「どーしてーー　いーじゃんいーじゃん」
「・・・・・襲いますよ」
「うぃー♪喜んで」
「おいっ・・・・　あっ！」
「え？何？」
「車に忘れ物してたんだ僕　ちょっと駐車場行って取ってきます」
「明日でいーじゃん」
「今夜　チェックしておきたいものなんですよ　すぐ戻りますから」

そういって車の鍵だけを持ち虎人は部屋を出て行った
聡史が見た虎人の最後の姿だった

「小林虎人クンだね？」
低く囁くような声が耳元に響き　背中に何か尖ったものを突きつけられた
振り向く間もなく　虎人の口と鼻がしめった布で覆われた
「はい？うっ！」
闇夜に白いセダンが走り去っていった

「あれ？虎人？どこ？虎人？」
自宅マンションの駐車場から部屋へと向かうほんの数分の出来事だった
虎人がいつまでたっても戻らず心配になり
マンションの玄関先まで聡史はサンダルをつっかけて出てきた
その目前を白いセダンは走り去っていった

小林虎人を乗せて
聡史はその事実を知らない
そして　そのまま　虎人は帰ってこなかった

4．部屋にて（後書き）

コメント・感想などお寄せ頂けますと励みになります
よろしくお願い致します

5．屋敷にて

5．屋敷にて

「虎人様　着きました」

「・・・・・・・・」

手足を拘束され　セダンに押し込められて連れてこられた場所

それは　都心にあるとは思えない　漆喰の高い塀に囲まれた

立派な門から屋敷の玄関まで　まだ車寄せにたどり着くのに４～５

分もかかるような

たいそうな広さと豪華さの屋敷であった

虎人は車から降ろされるとすぐに手足の拘束を解かれた

そして　屋敷へと招き入れられ豪華な応接セットのある広い居間へ

と案内された

セダンを運転してきた男は黙って居間の入り口に立っている

そしてソファーに怪訝そうに　警戒を解かないままに座った虎人の

前に

一人の紳士が現れた

紳士は　かの社長室で男と話し合いをしていた社長秘書　佐藤だった

佐藤は虎人に丁寧な一礼をすると静かに虎人に語りかけた

「ここは四菱財閥の会長のお屋敷です　手荒なマネを致しました事

をお詫び申し上げます」

「・・・・・よ・・つびし？」

「虎人様のお母様のご実家です」

「母の？」

「はい　恵様と　叔母様の香様のお育ちになったお屋敷です」

「・・・・・」

「今は　会長がお一人でお住まいです　虎人様のおじいさまです」
「祖父・・・・」
「おばあさまは昨年お亡くなりになられました」

「去年・・・・母はその事は？」
「ご存じだったと思います　お知らせは差し上げましたから」
「ご病気だったのでしょうか？」
「いえ　ご老衰といったところでしょうか・・・」
「母は・・・祖母に・・生前に会えたのでしょうか？」
「いいえ　恵様は小林さまとご結婚されてから一度もお屋敷にはお戻りになっておられません」
「そう・・・なんですか」
「虎人様はご両親様から何もお聞きになっておられないのですね？」
「？」

「ご両親様はお若い頃にかけおち同然でご結婚になられて会長は　それをお許しにならず　今に至っておられます」
「そう・・・なんですか」
「突然の事で驚かれた事と存じますが　虎人様には会長に　おじい様にご面会頂きます」
「僕・・が？　どうして突然　僕がこんな風にここへ連れてこられなくちゃいけなかったんですか？」
「事情は・・・会長からお聞き下さい　申し遅れました　私は現社長の秘書をさせて頂いております　佐藤と申します」
「さ・・佐藤さん・・・」
「現社長は虎人様のお母様恵さまのすぐ上のお兄様です」
「叔父・・・にあたるワケですね」
「そうです　そして今社長は病床にあり　余命半年の宣告を受けておられます」

「半年！・・・・・」
「はい・・・そして　四菱財閥グループ企業は会長の後見を必要としております」
「次期・・社長を・・・ですね」
「さすが虎人様　お話が早いです　では　会長がお待ちです　こちらへ」

虎人は促されるままに佐藤に続いて屋敷の廊下へと出た
赤く毛足の長い絨毯が敷き詰められた廊下の両側には　重厚なマホガニーの扉がいくつも
連なっている　その一つの前で佐藤は立ち止まり　虎人を振り返って言った

「再度　突然の　しかもこのような手荒な手段でお招きいたしました事をお詫び申し上げます
どうか　私どもの苦汁の決断と思ってお許し下さいませ　会長は何もご存じありません
ただただ　お孫様の虎人様に　お逢いしてお願いしたい事がおありになる・・・そのために
私どもはこのような事を致しました　何卒　何卒　そのお胸に留め置き頂きたく・・・」

「・・・・どういったご事情かは存じませんが・・　僕の母がこのような屋敷の令嬢だったことは
全く知りませんでした・・・・正直　何が何だか判りません・・・・
でも
何やら・・・大変な事態もおありのようでお察し致します　僕に・・・
僕にできる事なら
祖父に・・・おじい様にお目にかかるのは　何も　何も問題はありません・・・どうかご心配なく」

「ありがとうございます　虎人さま・・・　では　お部屋へ・・・」

部屋の扉は二重扉になっていた　廊下側の扉を開けると　人一人が立てる程のスペースの向こうにもう一枚の扉が閉ざされていた　重々しいノックの音に　中からしゃがれた低い声が応えた

「お入り・・・」

5．屋敷にて（後書き）

コメント・感想など　お寄せ頂けますと
今後の励みになります
よろしくお願いいたします

6．捜索・戸惑い

6．捜索・戸惑い・そして

一方　忽然と姿を消した虎人を捜して　聡史は奔走していた
知人や友人に電話をかけまくり　マネージャーと共に心当たりを探し歩いた
しかし　一向に虎人の消息はつかめず　警察に届けたものかどうしたものかと
真剣に心配をし始めていた

そこへ　一本の電話がかかってきた
佐藤と名乗った男は　虎人は今後　四菱財閥グループの次期社長としての研修に入るため
もう　そちらへは戻れない　と一方的に告げた
どういう事かと問いただす聡史に応える事なく電話は切れた

つーつーつー　と切れた電話の音が聡史の耳に悲痛に響いていた

「四菱財閥って何だよ　次期社長ってどういう事だよっ！！」
苛立つ聡史をなだめ　マネージャーはパソコンをひらいた
「これだ・・・・」
マネージャーが調べ上げた画面　そこには　四菱財閥グループ企業の詳細が示されていた
そして　どうやらその会長の息子である現社長が病床にあるらしいこと
そして　四菱グループは長引く不況のあおりを受けて　関連企業に随分な負債を抱えているらしい事
何より　虎人の母　恵が　会長の長女であった事などを知った

「虎人が・・・四菱財閥の会長の孫・・・・？」　聡史にはにわかには信じられない事実だった
マネージャーさえも　虎人を送り込んできた張本人である母　恵の素性については何も知らなかった
今更のように　虎人の輝かしい学業の成績が思い出され
血統の良さだったのかと　言い知れぬ感慨めいたものさえ湧き上がってきた
しかし
なぜ　今虎人がこうして拉致も同然に連れ去られなければならないのか
疑問は何一つ解決されていなかった

何より
もう二度と戻る事はない　そう　あの電話の主は言った
聡史は戻らぬ虎人の事を思い　胸が痛むのを隠せなかった
激しく動揺している自分を押さえる事もできなかった
虎人がいなくなった
戻ってこない
それは　聡史にとって晴天の霹靂であり　受け止めがたい現実であった

虎人本人の口から説明を聞くまでは　どうにも何も信じる事ができない
聡史は　ただひたすら　それからの数日を　虎人からの連絡を待って過ごした
ただ　その身の無事と安全が確認できた事だけが救いではあったが
何もかもが疑問符に彩られ　謎に包まれていた
食事もろくに喉をとおらず　仕事も手につかず
聡史は虎人の帰りを　せめて虎人からの直接の連絡を

待ち続けていた

そんな噂を聞きつけて　憔悴しきった聡史を慰めようと　西崎たかおが訪ねてきた
美味いと評判の焼肉店から肉を買い込み
ホットプレート持参で駆け付けた西崎は　聡史を励まし　慰め　肉をすすめた
皿の上の肉を箸で突き回すばかりで　一向に口に運ぼうとしない聡史に業を煮やし
西崎は自分の箸でつまみ上げた肉を聡史の口にねじ込んだ

「喰えよ　喰わないとばてちまうぞっ！」
「んぐ・・・・」
「虎人クンは帰ってくるよ　戻ってくるって心配ないよ」
「・・・・・・・・・」
「事情がわかるようにちゃんと連絡してくるって！このままいなくなったりしやしないよ」
「・・・・・・・・・・」
「聡史・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

青白く透き通る程に血の気のない聡史の顔を見つめ　西崎は深いため息をついた
その時　ポケットの中で西崎の携帯が小さく鳴った

（ん？・・・・電話？）「はい・・・・もしもし・・・・」
「・・あ・・たかおさん？俺ですタカシです・・・・ごめんなさい電話なんかして・・その　今どこですか？」
「ああ・・・今　友達の家だ・・うん・・今日は撮影にいくよ　ああ」

「あの・・最近　会ってないから・・その次はいつ会えるかなぁって・・」
「タカシ・・・ごめんな　また連絡する　じゃ」
「あ・・たかおさ・・」

西崎は一方的に会話を切り上げると電話を切ってしまった

「誰？」　聡史の問いかけに西崎はちょっと戸惑った表情を浮かべながら応えた
「ん・・・・ちょっとした知り合いだ」
「へぇ・・・・」
そう言ってまた黙り込んでしまった聡史の顔を見つめたまま
タカシと名乗った青年の事をぼんやりと思い出していた
華奢な骨格　色白な小さな顔　大きな目に赤い唇
どこか聡史を思い出させるその面影　右目の下に小さなホクロのある青年

聡史を抱けない寂しさに一人酒を飲みにでかけたクラブで知り合ったタカシは健気にも　身代わりでもいいよと西崎に抱かれる事を望んだ
そうやって二人の付き合いは始まった

それでも　西崎はタカシを抱きながら聡史の事を思っていた
それに気づいているのかいないのか
タカシはいつも西崎の身体を抱き締めて　いつまでも離れようとしなかった

西崎の心の中で　タカシの泣きぼくろを涙に濡らす姿がゆらりと揺れた

7．対面

7．対面

「会長　お連れしました」　佐藤の声に部屋の中央に置かれた大きな寝台から低い声が応える

「近くへ・・・こちらへ寄りなさい」

佐藤に促され　虎人はその低い声の持ち主の顔が見える場所まで歩み寄った

それは　大きな寝台の白い羽布団に埋もれるようにして座る小さな老人だった

「とらと・・・か」　老人は節くれた手を伸ばして虎人を招いた

「小林・・小林虎人です」　虎人はどことなく人を圧倒するこの老人に丁寧に頭を下げた

「顔を・・・顔をよく見せてごらん・・・ほぉっ・・恵の若い頃に良くにておるな　気の強そうな目じゃ」

「・・・・・・・・・・・・」

「虎人・・・」

「はい」

「お前に頼みがある」

「はい」

「お前の母は私の長女だ　そして長男が今死にかけている四菱の現社長だ

そして　あいつは１０年前に離婚していて今後を継ぐべき後継者がおらん

別れた女房はあいつの一人息子を連れて家を出た　そいつは今頃２５になってるだろう

だが　そいつに会社を継がせるワケにはいかない　なにしろ別れた女の息子だ
今となってはこの家とは無関係な人間だ
だから　今　四菱を継げるのは虎人　お前一人なんだ　頼む　どうかどうか四菱グループの何万という社員たちとその家族のために　会社を背負ってくれ」
「四菱財閥を・・・僕が？」

佐藤が静かに頷くのが見えた
虎人は混乱する頭で必死に状況をのみこもうと努力した
自分の置かれた状況を　必死に整理して考えようと試みた
しかし　ことごとく失敗に終わった
そして　深く長いため息をひとつついた
その後　大きく深呼吸すると　ベッドの老人に向かってよく通る声で言った

「事情は　まだよく理解できません　正直　なぜ僕が　とぐるぐると結論もでません
でも　正直なところ　僕は大学で経済学を学びたいと思っていましただから　四菱のような大企業を実地に体験できるのなら　願ってもないチャンスだと感じます
是非　勉強させて頂きたいと思います
僕に　何ができるのか判りませんが　お役に立てるのなら・・・喜んで　お引き受けします」

老人の顔に安堵と喜びの表情が浮かび　皺の刻まれた手が　虎人の手を強く両手で握りしめた
佐藤の顔にも笑みが浮かんでいた

（ハーバードに行けなかったのだって　元を正せばお袋の勝手な陰

謀のせいだったんだ
祖父の頼みをきいて悪い事があるワケがない　親孝行はする気にならないけど
敬老精神は溢れる程にもちあわせてる　こんな面白い経験はなかなかできないだろうし・・・）

虎人は心の中で　ひそかに湧き上がってくる興奮を宥める事に苦労していた
そして　すっかり　自分の元いた世界　結城聡史や芸能界といった事たちを
きれいさっぱり思考回路の外に置き忘れていた

虎人が　その事に気づいたのは
佐藤について　会社経営のなんたるか　そして　四菱グループについての研修を受け
実際にその仕事に係わりはじめ　刺激的な学びの日々になれ始めた頃
そう　あの突然の拉致監禁からじつに3ヶ月もの日々が過ぎ去った頃だった

「虎人様　身の回りにご不自由はありませんか？」　佐藤に聞かれ
　虎人ははっと我に返った
買い与えられたスーツやワイシャツ　身の回りの品々に不足はなく
　不満もなかった
屋敷には虎人の専用の部屋も与えられ　毎朝送迎の車で虎ノ門の本社へ赴く
会社にいる間は時間も忘れて　社の抱える問題点に取り組み　若さならではの
斬新な改革案を練り　合間をぬっては要人たちから四菱の歴史からその成り立ちまでをレクチャーされた

元来　学ぶ事　そして何かを創り出す事　改革してゆくこと等に深い興味を寄せ
楽しむ事を知っていた虎人は　与えられたこの環境を受け入れ　満喫していた
そして　すっかりと忘れていたのだ　聡史たちの事を

（何てことだ・・・僕は今の今まで結城さんの事をほったらかしにしてしまった・・・・
あの夜　連れてこられてから　そのまんま　何の連絡もしないままに　夢中で会社の事にのめり込んで・・・）

この期に及んでようやく虎人は事態の深刻さに思い当たった
慌てて聡史の携帯に電話をかけた

「もしもしっ！結城さんっ　僕です　虎人です」
虎人の声に電話の向こうに小さな驚きの息がもれるのが聞こえた
しかし　その後に届いた音声は　聡史のこれ以上ない程に不機嫌な声だった
「・・・・虎人？・・・・なに　今頃」

「ゆ・・・結城さん・・・あの　僕　いろいろあって　その　連絡もしないですみませんでしたっ
今　祖父の所に住まわせてもらいながら　四菱の仕事を手伝っていて・・・その・・・・」
「もういいよ」
「結城さん？」
「勝手にしろよ」
そういって電話は一方的にきられてしまった
（結城さん・・・・・・）

虎人は受話器を握りしめたまま　かけ直す事もできず　ただ　つー
つーつーという音を聞いていた

8．改革の時

8．改革の時

四菱財閥の関連企業は　保険会社から商社　造船　銀行まで
ありとあらゆる業種に係わり　その負債の多くは銀行が抱えている
ようであった
しかし　グループ企業の悲しさかそれを業績のよい業種で補わなく
てはならない
その為の努力と改革に現社長は身体の不調を訴えながらも懸命に取
り組んできた
そして　ついにはその身体は悲鳴をあげ　取り返しのつかない状態
にまでなってしまっていた

虎人は秘書の佐藤から　四菱財閥の同族達についてもレクチャーを
受けた
総本家である四菱と　その分家である６つもの同族たちが各企業の
役員に名を連ねている
代替わりが進む分家たちは若い当主になってからは　グループ企業
への就職を嫌い
四菱を離れて暮らすものも少なくなかった
現代の四菱グループは　もはや財閥とは名ばかりの
純粋なる企業グループのそれに近い内情なのだった
それ故に　抱えた負債は四菱に忠誠を誓うような社員たちばかりで
はなく
何万という一般社員の生活そのものにかかわる一大事なのであった

虎人は持ち前の好奇心と知識を総動員して　必死で佐藤の講義に取
り組んだ

そして　その真摯な取り組みと姿勢は多くの役員たちの心を打つモノだった
全くの素人　しかも１９歳の若僧　そう冷たく何ができるものかと遠巻きにしていた人々が　虎人の真面目な性格と年齢に似合わぬ豊富な知識と
多方面に渡る才能に魅入られていった

虎人もまた　そういった人々の期待に添えるようにと寝食を忘れて勉強に打ち込んだ
そして　商社の扱う一つの商品に目をつけた
それは　扱いも小さく　販売ルートもまだ確立されていないようなフランスのミネラルウォーターであった

虎人は佐藤に　この商品を　俳優　結城聡史をイメージキャラクターとして
大々的に売り出す事を提案したのだった
虎人は自ら事務所とマネージャーへ連絡をとり
頭を下げに何度も出向き　頼み込んだ
そして　２週間後　関連の広告代理店の社員を伴い
虎人はようやく了承を得た結城の事務所を訪ねたのだった

事務所に聡史の姿はなかった
久しぶりに会うマネージャーに虎人はすっかり着慣れたスーツ姿で名刺を渡し深々と頭を下げた

「その節は　大変なご迷惑とご心配をお掛けいたしました
その上　このような無理なお願いをご了承頂きまして　本当に感謝致しております」
いっぱしのビジネスマンに見える虎人の美丈夫ぶりを眺め
マネージャーは目を細めて微笑んだ

「虎人クン　立派なものじゃないの　おじいさまの会社を手伝ってるんだってね
大したものだよ　その若さで　僕らで力になれるなら喜んで協力させてもらうよ
まぁ・・・正直いって聡史はあんまりいい顔してなかったんだけどね」
そういって　微笑みは苦笑に変わった

「・・・結城さん・・・まだ　怒ってますか？」
「いや　彼だって大人だしね　虎人クンの事情だってよく判ってるだから怒ってるなんて事はないよ　ただ」
「・・・ただ？」
「寂しいんだと思うよ」
そう言ってマネージャーはまた柔らかく笑った
「・・・寂しい・・・・」
虎人はにわかにはその言葉が信じられず　思わず口のなかで反芻した

結局　その日の打合せに聡史が現れる事はなく
虎人は聡史に会う事ができないままに　また多忙なビジネスマンとしての
日々に忙殺されていった

虎人の企画した　ミネラルウォーターの販売は　人気俳優　結城聡史の起用が
大きくセールスに貢献し　その売り上げを順調に伸ばしていった
街中に貼られた聡史のポスターは　貼られるそばから盗まれ
コンビニエンスストアでのミネラルウォーターの売り上げも
四菱商社が輸入元のそのボトルが一番の売れ筋となっていった

虎人は他にも若い人達に人気が出そうな珍しい菓子の輸入を開始さ

せたり
オートバイに乗る若者に積極的に保険とバイク用のエアージャケットという
エアーバッグ変わりになるジャケットをセットにした商品などを企画し
その全てがそれなりの成績を残していった

そうした虎人の努力と活動は社内でも徐々に評価され
佐藤も鼻が高いですと嬉しそうに虎人に微笑んだ
無我夢中の毎日だった
それでも
毎晩　床につくと目を閉じる瞬間に思い浮かぶのは
結城聡史　その人の顔だった

こうして　虎人は四菱に身を置いて　はや半年を過ごそうとしていた

9．遠い愛　近い恋

9．遠い愛か　近い恋か

「聡史・・・さぁとぉしっ！」

「・・・えっ？」

「えっじゃなくて　ホントに大丈夫なのか？お前　顔色良くないぞ・・・」

「西崎さん・・・いつ来たの？」

「げっ・・そうくるかよ・・・オレ夕べ泊まったんですけど・・・」

「はぁ・・・そうでしたっけ」

「ったく・・・そんなに虎人坊やがいないとダメなのか？お前は」

「そぉ～んなぁ～んじゃ　ありませんよぉ～・・・」

「なんだかなぁ・・・その情けない顔と声・・・ファンが見たら泣くぞ」

「泣きますかね・・・・」

「泣くだろう・・・天下の美青年結城聡史のそのアホ面といったら・・」

「アホ面ねぇ・・・そのアホ面で水が売れるんですよぉ～だ」

「ああ　あのミネラルウォーターな　美味いよな」

「そぉ～でぇすかぁ～ねぇ・・・・」

「お前もいいとこあるじゃん　虎人坊やの顔を立ててやったんだろ？」

「そぉ～んなぁ～んじゃ　ありませんよぉ～・・・」

「まっ・・・いいけどな　オレには関係ない」

虎人が同居していた聡史のマンションから姿を消してから半年

仕事こそきちんとこなしている聡史ではあったが
私生活では　食事もまともにはとらず　霞とタバコで生きてるのかと
マネージャーを心配させていた

そんな聡史を心配して　西崎たかおは度々食品を抱えては聡史の元
を訪ねていた
昨夜も慣れない手料理を聡史に作り（そのほとんどは手をつけられ
る事がなかったのだが）
たまっていた洗濯物を片付け（といっても近所のクリーニング屋へ
持って行っただけ）
聡がソファーで寝入ってしまえば抱き上げてベッドまで運ぶ
そんな日々をどれ程過ごしただろうか・・・
やれやれと西崎は寝不足の頭をかいた

西崎は休日だけでなく平日でも仕事の許す限り　聡史の元を訪れる
ようにしていた
しかし　意外にも西崎は日常生活での作業が得意ではない
基本的に自分の身の回りの事　料理なども何でもできる聡史や
見事に何でもできます　な虎人に比べると　明らかにその不器用さ
は飛び抜けている
従って　やる気なく　だらだらと（珍しく）部屋でぐずぐずと何も
せずにいる聡史の
世話をやこうにも　何ができるワケでもなく
ただただ　西崎は聡史がいよいよ病院へかつぎこまなくてはならな
いような
事態にまで身体を壊さないように　見張る事に徹していた

そして今日もまた　聡史はろくに食事もとらないままにソファーで
眠ってしまった
ベッドに横たえた聡史の横に腰を下ろし　その白い顔を見つめた

（無防備な寝顔でよぉ・・・抱き上げたらあんまり軽いんでびっくりしたよ・・
あどけない顔しちゃってなぁ・・・・また痩せたんじゃないか？聡史・・・・）
そっとその頬に手を触れてみる

ふっくらと柔らかそうな唇はうっすらと開き　淡い珊瑚色をしている
吸い寄せられるように　西崎はその唇に自分の唇を重ねた
しっとりとした暖かい感触に　ずきんと胸が鳴った
ほのかに開かれた唇の隙間からその歯茎にそっと舌で触れる
「んんっ・・・・」　聡史の唇が開いた所に舌を差し込んだ　夢中だった
聡史の舌を探し当てるとそっと吸い上げた
応えるように絡められる聡史の舌が甘かった
西崎の下腹部に全身の血が集まるような衝撃が走る
その時
「んんっ・・・と・・・らと？」
聡史の喉からかすかな囁くような声が漏れた
その名を聞いて西崎は思わず聡史に覆い被さるようにして口づけていた身体を起こした
だれかに頬を強く叩かれたような衝撃だった

「さ・・・聡史・・・」
西崎はその頭を数回横にふり　何かを断ち切るような思い詰めた顔でベッドのそばから離れた
リビングのソファーに頭を抱えて座り込んだ
その時　背もたれにかけていた上着のポケットで携帯が鳴った
「もしもし・・・・西崎です」
「たかおさん？タカシです　あの　今　何処ですか？」
「・・・タカシ・・・・あっ・・ああ　今　友人の・・友人の所だ」

「・・・結城さんの　結城聡史の所なんでしょ？」
「えっ？」
「たかおさん・・・・俺　待ってるから・・・ずっと待ってるから」
相手が自分の名を呼ぶのを途中で電源を切った
西崎は携帯をポケットにねじ込んだ

電話の相手は西崎の今の恋人といっていい相手だ
西崎は聡史を想いながらも　どうしても自分の手にはいらない聡史に胸を焦がしながらも
持て余す身体の熱を　タカシというどことなく聡史に面影の似た色の白い華奢な小柄な青年にぶつけた
タカシを抱きながら聡史の事を思った
抱き合うぬくもりが恋しかったのだ　タカシにも愛情を感じている
　そう思っていた
しかし　虎人の失踪から　一人になった聡史をほってはおけず
いや
やはり聡史への思いを断ち切ることができず
西崎はタカシを放り出し　聡史の元へと通い詰めていたのだ
（本当に愛してる相手には・・・無茶できないっつうか・・・手が出せない
あげくに他の男の名前なんか呼ばれた日には・・・・・たまらんなぁ・・・・・）
西崎はこの夜もまた　眠れぬ時間を過ごす事になった

１０．素直になれる時

１０．素直になれる時

（ＣＭの撮影の時くらい　顔を出すかと思ったのに・・・来なかった・・・虎人・・・）

聡史もまた　自分の心と向き合う事ができずにいた

虎人が部屋にいた頃　聡史はよく西崎の家へ一人で遊びに行った
でかけるから晩飯いらないよぉ　と言うと　虎人は笑って言った
泊まりですか？
うんと応えると決まって言った　携帯持っていって下さいねぇ～
そんなやり取りをしてきた　と話すと　西崎は心底不思議そうな顔をしたものだ
お前らの関係って一体なんなの？と

聡史は西崎のマンションを訪ねては　何だかんだと西崎の世話を焼き
料理を作り　部屋の掃除をし　甲斐甲斐しく片付けをして
作った料理を西崎が美味そうに食べるのをニコニコと眺めた

そして　西崎の気持ちを知ってか知らずか
その誘いに艶然と微笑んで身を委ねる夜もあれば
さりげなくその腕をすりぬけて帰ってゆくこともあった
そしてそういう時は決まって　今日は虎人に帰るって言ってきたから　などと言った

西崎が聡史のこういった行動に頭と胸を大いに痛めている事を
聡史の本心が一体どこにあるのか悩み抜いている事に
聡史はあえて　気づこうとはしなかった

そしてまた　虎人の気持ちにも　聡史は向き合おうとはしてこなかった
何より
自分の心がどこにあるのか
聡史は確かめようとも思わなかった

それが今
虎人が部屋にいない　ただそれだけがこんなにも心を乱す
そして　あれ程自分から恋しく憧れていた西崎にこうして身の回りを心配され
毎日のようにあれやこれやと世話される事を
素直に喜べない自分がいる

自分の家なのに　居心地が悪い　そして居場所がないように感じる
みるともなく眺めていたテレビの画面に　自分が出演したミネラルウォーターのＣＭが流れる
爽やかな笑顔を振りまく男が自分とは思えない
素直に自分の心と向き合うことができない
虎人に会いたい　そういって悲鳴をあげている自分の心と向き合えない

虎人はどう思って過ごしているのだろうか
自分を仕事の対象に選んだ理由は何だったのか　知りたいと思った
今　虎人はどうしているのか・・・・

虎人もまた　その頃　珍しく一人の時間を過ごしていた
社長室に佐藤と缶詰になって練り上げていた企画が一通りの仕上がりをみたため
遅めの昼食をとりに四菱商社の近くにあるカフェへとでかけた
ネクタイを少し緩め　運ばれた水を飲み干した

（結城さん・・・どうしてるかなぁ・・・
結局　あれから一度も会えてないし・・・声も聞いてない・・・・）
出来上がったミネラルウォーターのＣＭは評判も良く
コネをふるに活用しただけじゃないかと嫌味を言っていた社員たちも
今となっては虎人の手腕と企画の良さを認めていた

（どうしても・・・結城さんに出て欲しかったんだ・・・ホントは
自分で話したかったな・・・）
虎人もまた気持ちを持て余していた
無我夢中だった日々を乗り越えて　少しの余裕が生まれた今
やはり気になるのは聡史の事だった
このまま　二度と出会える事なく　このまま時は流れてしまうのだ
ろうか
それは・・・・哀しすぎる

虎人は　ふと席をたつと店の外へ出た
携帯を掴み　ダイヤルする
「・・・はい」
「・・・あの・・・結城さん・・僕です　虎人です・・あのっ切ら
ないでっ！」
「あ・・ああ・・切らないよ　虎人」
「よかった・・・結城さん」
「ん？」
「会いたいです」
「やぶからぼうに何だよ　撮影にもこなかったくせに」
「会いたいです」
「くすっ（笑）なんだかなぁ」
「メシ・・・ちゃんと食ってますか？」
「ああ」

「ちゃんと寝られてますか？」
「うん」
「ＣＭ・・・評判いいです　ありがとうございました　引き受けてくれて・・・・」
「ああ・・なぁ　虎人　どうして俺だったんだ？」
「それは・・・さわやかで瑞々しくて　若者に人気のあるキャラクターという事で・・・・」
「そいつは企画のプレゼン用の文章だな　ホントのところを聞かせろよ」
「・・・・僕の　水も空気もなくちゃ生きていけないものだから・・・だから」
「だから？」
「貴方がいないと生きていけない・・・・から」
「それは　俺の台詞だよな　虎人がいなくちゃ　生きていけない・・・」
「結城さん・・・」
「戻ってこいよ・・・虎人」
「・・・・・・・・・・・」
「待ってるよ」
「はい」
「俺も自分の仕事にやりがい見つけて頑張るから　虎人も頑張れ」
「はい」
「頑張ってる虎人を励みに俺も頑張る　だから　いつか　戻ってこいよ」
「はい」
切れた電話を握りしめ　暖かいものが胸にあふれるのを噛み締めた

１１．狙う者

１１．狙う者

そんな虎人を見つめる目があった
それは　あのライカの男ではなかった
カフェの奥まった席から虎人を見つめる年配の女性　それは　かの
現社長の元婦人
思い詰めた様子で席を立つと　おもむろに虎人に歩み寄ってきた

「失礼ですが」
「はい？」
「小林・・・小林虎人さんでいらっしゃいますね？」
「はい・・・そうです」
「私　山井と申します・・・元は四菱の妻でございました」
「社長の？」
「ええ・・・あの・・・少し　お時間を頂けますでしょうか？」
「あ・・はい」

虎人は婦人を席にエスコートするとウェイトレスにコーヒーを二つ
オーダーした

「お話というのは・・・？」
「小林様に折り入ってお願いがあるのです」
「お願い・・・」
「息子を・・・息子を四菱に・・社長補佐の元の部署へ戻してやって下さい」
「ご子息・・・・」
「離婚して１０年　息子は四菱に実力で入社いたしました

社長の息子と言うことは伏せての事でしたから　一切コネだったとは思いません
そして実力で社長補佐の部署にまで配属されたのに
人事部長から　離婚した女の息子に社内にいられては困ると
ただそれだけの理由で　何の説明もなく　一方的に退社を命じられました

息子は　本当に良い子なんです
父親の病気の事も知って　大変心配しております
自分にできる事があれば手伝いたいのにと・・・・・そんな息子が不憫で・・・」
婦人はハンカチで目元をそっと押さえた

「お話を・・・・詳しく　伺わせて下さい・・・」
虎人は姿勢を正して座り直した
「ご主人の・・・社長の病状はここへきて随分と落ち着かれています
主治医の先生にも　随分と明るい見通しが期待できるとおっしゃって頂いてます
会社の状態が良くなってきて　社長も心労が軽減されたのではと・・・・」
「そうですか・・・出来ることなら　主人が・・・社長が存命のうちに
息子に・・・息子に近くで仕事をさせてやりたいと・・
そう願うのは私のエゴなのでしょうか・・・・」

婦人は虎人の目をじっと見つめて訴えた
「ご子息の退職については会長や佐藤さんは・・・どのようなご対応だったのですか？」
「会長はご存じなかったと思います・・・」
「そうなんですか・・・お力になれたら・・と思います」

「よろしくお願い致します　勝手なお願いとは重々承知しております
ただ・・・どうしても　父親の存命の間に　もう一度　もう一度近
くに
仕えさせてやりたいのです」
婦人の涙ながらの訴えに　虎人は思案に沈んでいった

一方　西崎の部屋では

「たかおさん・・・俺　たかおさんの事本気だよ　俺だけを見てよ
振り向かない男なんかに・・・たかおさんが振り回されるのを見て
いたくないよ」
「タカシ・・・・」
「俺はあの男が憎いよ　結城聡史さえいなかったら　たかおさんが
こんなに苦しむ事ないのに」
「タカシ・・・・お前・・・・」
「俺と暮らそうよ　たかおさん　俺ならいつだってたかおさんだけ
を見つめてるのに　想ってるのに」

（聡史は・・・・俺にとっての聡史は　そう　気障かもしれないけど
どこか　運命の女神だとか　幸福の天使みたいな　そんなもんなん
だよ・・・・タカシ・・・
それが本当に気まぐれに　時々俺の腕の中に飛び込んできたりする
もんだから・・・
どうしても　どうしても諦められないでいるんだ・・・決して俺だ
けのものになんかならないって判ってるのに）

西崎は大きな目に一杯の涙を溜めて　健気に詰め寄るタカシという
恋人をそっと抱き寄せながら
心の中では結城聡史の名を呼んでいた

この腕に抱き締めたいのは　本当はただ一人　聡史だけなのに・・・・と

そんな西崎の心の内を知ってか気づいてか
タカシは身をよじって西崎の腕の中からのがれると　涙の乾かない瞳をきっと見開き
赤い唇をきつく噛み締めて西崎を睨んだ
「もう・・・もういいよたかおさん　俺は　俺のやり方で貴方を俺のものにしてみせるからっ！」

そう叫ぶと身を翻し　タカシは西崎を残し部屋を出て行った
「タカシ・・・・」
西崎は　のろのろとタカシの忘れていったジャケットを手に後を追ったが　もうその姿はどこにもなかった
部屋に戻るとソファーに崩れるように座り込んだ
身体を重ね　繋いだ仲のタカシ
どこか聡史の面影をその顔に重ねてしまう優しげな整った顔立ち
聡史よりは１０センチは小柄であろうタカシの暖かい肉体が　今は恋しかった
本当の恋人というのなら・・・・タカシのような相手の事を言うのだろうか・・・ふとそんな事を想った

しかし　その夜　事件は起きた
結城聡史が刺されたのだ　タカシに・・・・

11．狙う者（後書き）

コメント・感想などお寄せ頂けますと励みになります
よろしくお願い致します

１２．せつない想い

１２．せつない想い

それは宅急便を装った来訪だった
ぼんやりと扉をあけた聡史は目の前にたつ自分より小柄な青年の
真っ白な小さな顔を見つめていた
そして　左の脇腹に走った鈍い痛みにしばらくは気がつかなかった
その青年が涙を流していたから
泣きながら　ただ赤い綺麗な唇を噛み締めて涙を流しながら
青年は小さな果物ナイフを聡史の脇腹に体当たりをするようにして
突き刺したのだ

「・・・っつ・・な・・なんで？・・・・だ・・だれ？」
白く霞んでいく意識の中で　聡史はその青年の顔を見つめていた
青年は震える唇から　細く小さな声で何度も何度も呟いていた

「あんたが悪いんだっ！あんたが　たかおさんを　たかおさんを振
り回すからっ
たかおさんは俺と一緒にいるのがシアワセなんだ・・・だから　あ
んたなんかいない方がいいんだっ！！」
「・・・たか・・お・・？」
聡史の意識はふっつりと途切れた
（西崎さんの・・・・こと　俺がふりまわして・・た・・？そ・・
んなこと・・・ないの・・に・・）

聡史が意識を取り戻したのは　病室のベッドの上だった
点滴が繋がれた腕　その先の手をしっかりと握りしめていたのは
虎人だった

「・・・！・・・・虎人・・・・」
「結城さんっ！気がついた？よかった・・よかった本当によかった・・・」
「・・・・俺・・・・」
「出血が多かったから・・・・でも傷はそんなに深くなかった　本当によかった
相手が小柄で力も弱かったのが幸いだったって・・・・3週間位で退院できるそうです」
「どうして・・・・虎人がここに？」
「ああ・・・あの　僕電話の後　ちょっといろいろあって　それで結城さんに話を聞いてほしくて　で会社の人から時間もらってマンションに戻ったんです
そしたら　結城さんが玄関で倒れてて・・・・びっくりしました」
「そっか・・・・」
「犯人の顔　覚えてますか？　結城さんの意識が戻ったら事情を聞きたいって
警察の人が待ってるんです・・・・話せます？」
「え・・・ああ・・・でも顔も見てないし・・・何も覚えてないんだよ・・・・」
「そう・・・・ですか・・・・」
「いや・・虎人には嘘はつきたくない　でも警察に話すつもりはないんだ
どうやら・・・・俺にも責任の在ることだったみたいだから・・・・」
「結城さん？」
「虎人・・・・来てくれてありがとう　付き添ってくれてたんだね
嬉しいよ」
「いや・・・このまま死んじゃったらどうしようって・・（笑）思ってました」
「だよな（笑）」
「じゃ・・・警察の人　呼びますね　話は後で聞かせて下さい

それと・・・僕の話も・・・聞いて下さいね」
「ああ」
聡史はタカシの犯行を警察には話さなかった
また　もし犯人が見つかっても起訴しないと言い張っていた
事故のようなものだった　そう言い張っていた
警察も聡史の立場上　公にはしたくないのだろうという事情も察してくれた
そして　しつこく捜査をすすめる事もなかった
そして　聡史が入院して1週間後
たかおが病室へと現れた
虎人に伴われてやってきた西崎は　ベッドの聡史を見ると震える手を握り併せて深々と頭を下げた
「す・・・すまなかった・・・聡史・・・お前をこんな目にあわせてしまって・・・」
「西崎さん・・・やめてください　どうして貴方が僕に頭をさげるんですか・・・」
「あれは・・・・お前を刺したのはタカシという・・・俺の・・・俺の友人だ・・・」
「友人・・・？」
「虎人クンから連絡をもらって・・・すぐにこられなくてすまなかった・・・タカシを
あいつを捜して一緒に連れてくるつもりだった　だから　こんなに時間がかかってしまった
すまない・・・俺と・・・あいつを　許してくれ・・・無理な願いかもしれないが
今後　お前に二度とこんな思いをさせる事はないと誓う　だから・・

・どうか許してくれ・・・聡史・・」
「西崎さん・・・・」
頭を下げている西崎の後ろから　虎人が一台の車椅子を押して入ってきた
そこには　うつろな目をした青ざめたタカシが座っていた
彼の視線は焦点を定めていない　赤い唇がぼんやりと半分ひらかれたままだ
彼の　タカシの意識　いや心はそこにない
ただ　抜け殻のタカシの身体だけがそこに存在していた
「俺は・・・俺はいつかこいつが目を覚ますのを待つ事にした・・・ずっと・・ずっと俺のそばにいるとタカシは言っていた　だからそうタカシは友人じゃない
俺の恋人・・・そして家族だ」
西崎は虎人からタカシの車椅子を受け取ると自分で押して聡史のベッドサイドへと運んだ
「こいつだろ・・・お前の腹を刺したの・・・本当にすまなかった・・・聡史・・・」
再度深々と頭を下げた西崎に聡史は目を丸くした
「西崎さん・・・・俺・・・俺は刺されたんじゃない　バチが当たったんだ
虎人の事も　西崎さんの事も　俺は・・・俺は思い上がってたよ
欲張りだった
だから　もういいんだ・・・虎人も帰ってきてくれたし・・・俺は大丈夫だよ　心配しないで」
「聡史・・・・」
「・・・・彼・・・どうして・・こんな・・・」

「自殺・・・しようとしたんだ　薬を飲んで倒れてた　俺が見つけて病院へ運んだが・・・後遺症が・・・」

「・・・・・そう・・・」

タカシの白い小さな顔を優しい瞳で見つめる西崎の姿に
どうかその瞳にもう一度　タカシの笑顔が映る日がきますようにと
虎人も聡史も祈らずにはいられなかった

１３．虎人の決断

１３．虎人の決断

「ところでさ・・・・虎人の話って　何？」
「結城さん・・・僕と　僕と一緒にアメリカへ行きませんか？」
「アメリカ？」
「そう・・アメリカ」
「いつ？　どの位？」
「結城さんの怪我の具合が良くなったら　期間は３年か４年間」
「３年！？そんなに？　俺・・・俳優休業か？」
「いえ・・・向こうに拠点を置いて活動できるんじゃないかと・・・」
「ハリウッドデビューか？」
「ええ　それに飛行機での行き来なんてどーってことないですから・・・」
「それは・・そうだけど　でもなんでアメリカ？」

「僕は四菱商事の次期社長にはなりません」
「・・・えっ？」
「いや・・・仕事はとても刺激的で面白かったしやりがいもあって・・・続けたいと思ってます
でも　社長にはなりません　　元の　社長の奥様がご子息をお連れになって
僕からも会長と佐藤さんにお願いしたんです　どうか社長のご子息に後を継いでもらって下さいって・・」
「虎人・・・欲がないねぇ・・・」
「はははは（笑）　僕だって欲はありますよ　だからこうして話にきたんです」

「え？」
「僕はハーバードに復学する事にしたんです　それでＭＢＡとか取って
きちんとしたビジネスマンになれるようにもっと勉強しようと思うんです」
「へぇ～・・・」
「だから　結城さん　一緒に来てくれませんか？」
「・・・プロポーズ・・・みたいだな」
「はい　そのつもりですから」
「はいっ？・・・・」
「離れてみて判りました　違う世界に身を置いてみて身にしみて判りました
僕には貴方が必要なんです　一緒にいないとダメなんです　だから」
「・・・・・虎人・・・生産性のないプロポーズだよ？」
「生産性？」
「子孫繁栄は望めないからねぇ・・・・」
「子孫・・・（笑）」
「養子でももらうか」
「それもいいですね」
「行くよ　アメリカ　俺もアクターズスクールにでも通って勉強する」
「はい！」
「虎人・・・こっち来いよ」

ベッドの聡史にそっと近づき　虎人はその唇に静かに口づけた
聡史の点滴をしている腕に触れないように
傷に負担がかからないように気をつけながら　その身体を静かに抱き締めた
虎人の口づけを受け止めて　聡史の顔に笑顔が浮かんだ

その後　3週間の後　聡史は無事退院の日を迎えた
迎えに来た虎人の車で二人は久しぶりに揃って聡史のマンションへと戻った
渡米に備えて　虎人が荷造りをすすめていたこともあり
部屋の中には段ボール箱やらスーツケースなどが雑然と積んである

「会社の方は本当に大丈夫なのか？虎人」
「ええ　会長も結局はお孫さん　社長のご子息ですよね　彼の事とても気に入ってたみたいだし」
「そうなんだ・・・」
「ええ　とても真面目で優秀な人なんですよ」
「それはよかったな」
「はい」

「コーヒー　入れましょうか」
「いいね　病院では飲めなかったから」
「座ってて下さい　痛みませんか？」
「大丈夫　抜糸も済んだし　もう完全復帰だよ」
「後で傷　見せて下さいね」
「なんじゃそりゃ　やぁ～らしぃ～なぁ虎人」
「ははははは　単なる好奇心ですってば」
「風呂に入るとき見せてやる」
「楽しみにしてまーす　ははははは（笑）」
「まだ結構生々しいぞ」
「へぇ」
「小さな刃物でも結構刺さると痛いもんなんだな・・・・
まぁ・・・・彼の心の痛みに比べたら・・・こんなの大したこっちゃないのかな・・・」
「壊れちゃう程に心を痛めるなんて・・・・哀しすぎます」
「きっと・・・タカシさんも元のタカシさんに戻るよ　いつか」

「そうですね・・・西崎さんが付き添ってるんだし・・・」
「だよな・・・そうあって欲しいと心から思うよ・・・」

二人　愛用のソファーに腰をおろし　ゆっくりとコーヒーを味わった
この部屋に二人で揃うのは　あの拉致もどきに虎人が連れ去られてから
じつに一年近い月日が流れていた

「前に虎人がアメリカに残るっていって向こうで映画とかテレビに出て・・・」
「ああ・・・そんな事もありましたよね」
「あの時以来だな　こんなに長いこと虎人と離れてたの・・」
「そうですね・・・・今度の方が長く感じたかな・・・」
「俺も・・・・なんか　虎人が違う世界の人になっちゃったから余計　焦ったっていうか・・・」
「僕は元々芸能界にいられるような才能があるワケじゃなかったし・・・」
「もう俳優には戻らないつもりなのか？」
「ええ　ビジネスの勉強をして・・・いつか　いつか結城聡史をプロデュースできる位
でかいビジネスをたちあげて見せますよ」
「そっか（笑）楽しみにしてるよ」
「だから・・・」
「ん？」
「だから・・・僕と　ずっと一緒に　これからの時間を一緒に」
「ん　一緒に歩いて行こうな」
「ういっす！」

「風呂沸かしてはいるべぇ～っ！」
「背中流しますよぉ～（笑）」

「おお～　お手柔らかに頼むよぉ～　まだ病み上がりだ」
「韓国垢すりじゃあるまいし　僕そんな無茶しませんよぉ（笑）」

離れていた時間は二人を変えたのかもしれない
それでも　二人は変わらない
変わらず　お互いを何よりも大切な存在と感じられる事
そんなことが　何よりうれしかった

１３．虎人の決断（後書き）

感想・コメント等頂けますと励みになります
よろしくお願い致します

１４．甘い夜

１４．甘い夜

「俺もさ　アメリカ　考えた事あったんだ」
聡史が虎人の腕枕に頭をのせながらつぶやく
「結城さんがアメリカ？自発的に？へぇ」

「うん・・・音楽をさ　もっと真剣にやってみたくて　俳優の仕事は厳しいけど面白いし
まだまだ俺の事を使いたいって言ってくれる仕事も沢山くる・・・・・でも
このままじゃ　俺　いつか仕事に追いつかれちゃって一杯一杯になっちまうなぁって・・・
俺　器用な方じゃないだろ？だから仕事一つこなすのにも　準備する時間が
ものすごくかかるんだ・・・・そのうち　あっぷあっぷしちまいそうで恐いんだ
３０歳過ぎて　もっともっと引き出しの沢山ある人間になっていたい　ってそう思う
だから　ここらで思い切ってきちんと自分と向き合ってみたらいいのかなぁ・・・とかね」

「結城さんは真面目だからね・・・・でも　結城さんは自分で思うほど一杯一杯には
ならない人だと思いますよ　いつもちゃんと自分のペースとか判ってるし」
虎人は反対側の手でそっと聡史の髪を撫でながら微笑んだ

「マイペースってさ　周りに迷惑かける事もあるしなぁ～」
「結城さんはそうやっていつも周りに気を使うから　疲れちゃいますよ」
「俳優はさ　共同作業だからね　仕方ないよ　でもゆっくり詩を書いたりもしてみたいんだよな」
「いいですね　是非　取り組んで下さい　結城聡史の音楽　楽しみです」
「虎人に一番先に聞いてもらうから」
「ええ　是非」
嬉しそうに大きな口でにかっと笑う虎人を愛おしそうに見つめる聡史を
虎人はその腕の中に益々深く抱き込んだ

未だ少年期の華奢なラインを残しつつも眩い程に堂々とした肉体は
胸板も肩も腹部も一点のゆるみもなくしなやかな筋肉に覆われている
成長期真っ只中にある青く瑞々しい若竹のような長い手足
浅黒く日に焼けた艶やかな肌
固く黒くつんつんとした黒髪と同じ程に真っ黒な大きな瞳が
鋭い光を放つ　その瞳は今　腕の中の聡史を映している

虎人が黙ったままいると　多くの人は彼が怒っているのか
もしくは何か不愉快な思いでいるのだろうと感じる
彼の眉間にはいつも深い皺が寄り
大きな口元はへの字に固く結ばれて・・・・

しかし　聡史だけは知っている
そんな時の虎人が　実は何気ない物思いに耽っているだけだったり
もしくはぼんやりと何も考えていなかったりもすると言うことを

そして　そんな虎人が自分にだけはいつも正直な

素直な顔を見せてくれる事が　何より愛おしく思われる

その聡史はといえば　何よりの魅力はいつ何時にも独特な品を纏い
その美貌にもかかわらず彼の表情は演じる役柄によって
幾通りにも違った魅力を醸し　全くの別人のような錯覚さえ起こさせる
そう言った　幅広いイメージを定めない確かな演技力が
彼の人気を支えているのだろう

王子様役でも殺人鬼でも　おそらくは彼が演じれば全てが彼のために
用意された役　彼のための役であったと思わせる

そして何より　そのストイックなまでに自分に厳しく　仕事に取り
組む真摯な姿勢に
現場で彼と行動を共にする全ての人達が彼を尊敬し　可愛がり　そ
して好きになった
しかし　虎人は　そんな聡史が時折もらす　弱音やら悩みを受け止
める
ただ唯一の存在であった

お互いが　こんなにも求め合い　必要としあっていると言うことに
二人は今更ながらに　ようやく気がついた
そして　聡史もハーバードへの復学を決めた虎人と共に　アメリカ
へ渡る事を決意した
もう　離れて暮らす事など考えられなかった

「いつまでたっても・・・・どんなに頑張っても　僕は結城さんよ
りずっと１０歳年下で
どうしても追い越す事はできないけど・・・・でも　僕は僕の人生
をかけて

貴方を守っていきたいと思ってる　そして必ずそうできる自信もあります
だから　安心してついてきて欲しい」

「プロポーズだね（笑）」
「そうです」
「喜んで　ついて行くよ（笑）　虎人がいなくちゃ生きていけないもの」
「僕は　結城さんが俳優で食っていけなくなっても養っていける位のビジネスマンになります」
「俺は　虎人がリストラされて路頭に迷っても　マネージャーか付き人でやとってやるよ」
「ははは」
「ははは」

笑いながら抱き合い二人は唇を重ねる
虎人の唇が聡史の首筋を滑り　その滑らかな肌に淡い跡を残してゆく
胸元のささやかな突起に口づけると　そっと舌で転がし　赤くしこるそれを甘噛みする
「んんっ・・・」
聡史ののど元からくぐもった甘い吐息が漏れる
「ホントだ・・・まだ何だか痛々しいですね・・・抜糸の跡がはっきり判る・・・」
「な・・・舐めるな・・・くっ・・・くすぐったいっ・・・」
身をよじる聡史を抱きすくめたまま
虎人は　舌を聡史の脇腹から下腹部へと這わせ　そのまま
やんわりと頭をもたげ始めていた聡史のそれを口に含んだ
暖かい口腔に包まれると　聡史の中心に熱い血が集まってくる
その刺激に思わず腰をよじろうとする聡史を逃さずきつく抱き戻す

くびれを抉る舌先の刺激に聡史はうねるようにこみ上げてくる愉悦
感に腰が揺れる
一気に登り詰めてしまいそうな快感に意識が白くぼやけ始める

１４．甘い夜（後書き）

べたですがお約束のラブシーンです（爆）
ご笑納下さいませ

１５．二人の時

１５．二人の時

「虎人・・・と・・とら・・と」
熱に浮かされたように虎人の名を繰り返し呼びながら　聡史の腕が
虎人の背中に強くしがみつく
つつましく固くその入口を閉ざしていた蕾を虎人の熱を帯びた屹立
がこじ開けてゆく
「ゆ・・結城さん・・・力を抜いて・・・」
「んんっ・・・ん・・・」
虎人の腰は狭い場所をぎりぎりまで押し広げゆっくりと進む
「ちょっとだけ・・・我慢して」
そう言うと　虎人は一気に最奥まで貫いた
「あっ・・・ん・・・う・・・んんっ・・・・」
「凄く・・・熱い」
「とらとも・・・・」
虎人は　胸をあわせるように聡史の上に重みをかけながら
愛おしそうにその唇を吸った
舌を絡めあい　角度をかけて唇をなんども重ねた

「少し・・・動くよ」　虎人の囁きに聡史は小さく頷く
虎人の腰がゆっくりと聡史の身体を揺さぶる
その度に　聡史の前立腺が狙ったように擦りあげられその度に腰が
跳ね上がる程の快感が走る
「とら・・と　もぉ・・も・・だめかも」
「一緒に・・・」
「う・・ん・・・はぁっ・・・」
二人はきつく抱き締め合うようにして　ほぼ同時にその飛沫を放った

虎人はいつまでも聡史をその腕から離そうとしなかった
いつまでも　いつまでも

虎人は四菱商事から社内留学という待遇を得た　そして念願のハーバードのキャンパスへと戻った
聡史もまた　事務所との交渉の末　今後3年間は俳優業ではなく音楽活動を中心に
活動してゆくという方針を得た
年に数ヶ月　映画や単発のドラマの為に帰国する事もあるが
基本的には虎人と共にハーバードのキャンパス近くの部屋を借り
二人でそこに済むことにした
そして　アメリカを拠点として　作詞や作曲の仕事をこなしてゆくことになった
時間を作って　アクターズスクールやダンススクールにも通う予定だ

「結城さんがダンスねぇ・・・・・」
「何だよ・・・・悪かったな」
「いえいえ　西崎さんだってミュージカルに出た位ですからねぇ結城さんだってできますよ」
「それ・・・微妙な台詞だなぁ・・・西崎さんにもちょっと失礼かも」
「そうですか？（笑）他意はないですよ　僕」
「虎人の当座の目標はＭＢＡ？」
「そうですね・・・ついでに弁護士とかの資格も取りたいと思ってます」
「そう　凄いね」
「いつか・・・いつか貴方のマネージメントをするような事があったら
弁護士資格なんて持ってたらいいでしょ？」

虎人は大きな口でにっこりと笑って見せた
そうすると　普段の仏頂面からは想像もつかない程の無邪気な可愛らしい顔になる
こんな顔を知っているのは自分だけだなどと思うと　聡史もつられて笑顔になる

新しい二人の生活はまだはじまったばかり
これから何があるかわからない
3年後　虎人22歳　聡史31歳　どんな人生を歩んでいるのだろうか
一つだけ確かな事
それは　きっと　二人　一緒の時間を過ごしているはず
そして　またその先の何年かを　共に過ごすための努力をしているはず
二人が成長してゆく
二人で成長してゆく

恋人であって　兄弟であって　ライバルであって　そして家族
虎人と聡史　二人の日々はずっと続いていく

「虎人ぉ～　コーヒーとチョコレートぉ～」
「自分でやって下さいぃ～　僕　学校遅れそうなんですからっ！！」
「いぢわるぅ～」
「泣くなぁ～っ！！！」

相変わらずの　二人の日々？

１５．二人の時（後書き）

お付き合い頂きまして　ありがとうございました
「虎人少年の憂鬱」「虎人少年の毎日」「虎人少年　欧州紀行記」
そしてこの「虎人少年　外伝それから」
を持ちまして　一応のシリーズ完結となりました
枝物語で「京都にて」などもあり、
本当に虎人クンには随分活躍してもらいました（爆）作者も感無量です
読んで下さった方の中に「虎人」がイメージある存在として　少しでもお心に残るようなら
何にも代え難く嬉しい限りでございます

最期に感想・コメントなど
お寄せ頂けますと今後の励みになります
よろしくお願い致します

最期まで読んで下さって　ありがとうございました
ｔｅｎｓｕｋｅ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5596d/

虎人少年　外伝～それから

2010年12月8日02時01分発行